

離婚前提の夫が記憶喪失になつてから  
溺愛が止まりません

## 目次

離婚前提の夫が記憶喪失になつてから  
溺愛が止まりません

番外編 波乱のリゾートウェディング

離婚前提の夫が記憶喪失になつてから  
溺愛が止まりません

今日が、私の離婚記念日になる。

深い溜息をついた私——華僑院由梨は、テーブルに置いてある離婚届を陰鬱な気持ちで眺めた。結婚してから一年という月日は短い気もするけれど、愛のない結婚生活を過ごす期間としては長い。監獄に閉じ込められているかのように重苦しく、つらい日々だった。

「まさか、こんなことになるなんてね……」

自嘲を込めてつぶやき、私は栗色の髪を搔き上げる。

肩下まであるセミロングの髪は、緩く跳ねているだけ。薄化粧を施した顔は、目が大きいけれど、絶世の美人なんていう部類ではなく凡庸だった。

マンションのリビングの窓に映つた自分の顔は、二十六歳という年齢のわりに老けているように見えた。結婚生活について悩みすぎて、疲弊しきつてしまつたせいだろう。

一年前、社長令嬢の私は、会社経営者である華僑院斗真と結婚した。

華僑院家は元華族の流れを汲むホールディングスの創業者一族であり、斗真の地位も収入も結婚相手として申し分のないものだった。しかも、父の会社が経営難に陥つていたため、斗真が資本提

携を申し出てくれたのだ。資本提携を交換条件にした私との結婚を、両親は大喜びで承諾した。

いわゆる政略結婚なので、愛はない。

私たちは交際しないまま結婚に至つた。

だけど、初対面のパーティーで斗真に声をかけられたときに紳士的で優しそうな人だと思ったので、好意は持つていた。それに彼のほうからアプローチしてきたこともあって、結婚生活はうまくいくと思つたのだ。

『由梨さん、俺と結婚してください』

その台詞を自宅へ挨拶に訪れた斗真に言われたときは、舞い上がつた。しかも彼は、大粒のダイヤモンドが輝く婚約指輪まで用意していたのだ。

すでに資本提携の話はまとまつていたので、予定調和ではあつたが、きちんとプロポーズしてくれた斗真に信頼が持てた。

幸せになれる——

そう確信したから、私はプロポーズに応じた。なんの疑問も持たず、未来の幸せだけを夢見ていた。

これまで交際した男性はいたものの、いまだに処女だというコンプレックスを払拭したいという思いが強かつたのもある。

だが、私が幸福だと浮かれていたのは結婚式の日までだつた。初夜どころか、夫婦の営みは一度もないまま今に至る。

夫とはセックスレスに陥っていたため、結局、私は処女のままだった。

斗真是私に興味がないのか、それとも性欲そのものがないのか、あるいはなんらかの男性のコンプレックスを抱えているのか——もしかしたら愛人がいるのではないか、と考えたこともある。

そんな様々な疑問が湧き、それとなく訊ねてみたこともあるが、いつも答えをはぐらかされた。なにが原因なのかはわからないけれど、判明したところで、もはや夫婦関係を修復するのは困難だろう。私たち夫婦は、あらゆるところですれ違っているのだから。

「もう疲れた……」

何度目かわからない重い溜息をつく。

結婚して幸せになるどころか、擦り切れていくばかりの日々に終わりを告げたい。こんなにも悲しい思いを一生続けていくなんて、無為の極みだ。お互のためにも離婚するべきだと、私はどうとう決意した。

白い離婚届の用紙をあらためて見やる。

今日はちょうど結婚して一年になる結婚記念日だけれど、お祝いするなんていう状況ではなかつた。

私は斗真に離婚を切り出すため、彼の帰宅を待っているのだ。

父の会社に勤務している私のほうが帰りが早いことが多いため、いつもなら夕食を作つて待つているのだが、もうそんなことはしなくていい。

そもそも食事なんて作つても意味がなかつた。斗真是私の作る食事を見ても、眉間に深い皺を寄

せて箸を手に取ろうとしないのだから。理由を訊ねても、そのたびにはぐらかされて……の繰り返しだ。

要するに夫は、私のすべてが気に入らないのだろう。

私が優しい人だと勝手に解釈していただけで、本当の斗真は冷酷な人柄だったのだ。

そんなふうに思い返すのも、もう何回目なのか数え切れない。

だけどそんな懊惱は今日限りだ。

そのとき、玄関扉が開いた音が耳に届く。

斗真が帰宅したのだ。

彼がここへやつて来るのを、私は離婚届に眼差しを注ぎながら待つ。

「……ただいま」

リビングへ入ってきた斗真は、さつそく紙一枚だけが置かれたテーブルに気づき、硬い表情をしている私と見比べた。

柔らかそうな黒鳶色の髪に、眦の切れ上がつた涼やかな双眸。すつと通つた鼻梁と、薄いけれど形のよい唇。シャープな顎のラインは、美麗なのに勇猛な雄を思わせた。一八〇センチを超える鍛え上げた体躯を、三つ揃えの上質のスーツに包んでいる。

端整な顔立ちと恵まれた体格を併せ持つ夫は、どこから見ても魅力的な二十九歳の男性だ。

こんな人と結婚したら、誰もが幸せになれると夢見るだろう。けれどそれは、私には遠すぎる夢だつた。

室内の様子を見て、私が言いたいことをすでに悟ったのか、夫は愛用のビジネスバッグを持ったまま立ち尽くしていた。

私は「おかえり」の代わりに、決定的な言葉を口にする。

「離婚しましよう」

瞪目した斗真は無言だった。

だけど彼だって、こうなることは予期していたのではないか。

セックストレスなので当然のことく子を望めない私たちは、いわゆる仮面夫婦で、信頼関係や絆が築けなかつた。しかも理由があつてのセックストレスではなく、斗真は原因を明かそうとしない。つまり私を信頼していないから言えないのである。それがとても悲しかつた。

しばらくして、斗真は歩を進めて私の向かいの席に座つた。そして持つていたビジネスバッグを静かに床に置く。

彼は離婚届を一瞥すると、私をまっすぐに見た。

「急になにを言い出すんだ」

焦つたような声を出したのは演技なのだろうか。離婚したら世間体が悪いので、彼としては困るのかも知れない。

でも、私はもうこの状態を続けることはできなかつた。

私は無表情のまま、用意していた台詞せりふをつらつらと述べる。

「私たち、初めから夫婦でもなんでもないわよね。だつてセックストレスなんだから」

「それは……」

「あなたは私どいてもつらそuddi、いつも眉間に皺しわを寄せていたわ。私の作った食事に手をつけないし、一緒に出かけたこともない。子どもができるわけでもない。……私はもう疲れたの。この結婚生活にどんな意味があるのかわからない」

そこまで言って、始まりには意味があつたことを思い返す。

政略結婚で、会社同士のつながりが重要だつた。父にはまだなにも相談していないが、離婚に反対するのはわかりきつてるので事後報告にするつもりだ。

会社のためとか、世間体とか、そのためにこの空虚な結婚生活を維持するのにはもう限界だつた。「子どもはまだ？」と挨拶あいさつ代わりに、友人や職場、義理の両親などから訊たずねられる。そのたびに頬を引きつらせて言葉を濁していると、屈辱で涙が溢れそうになつた。

セックストレスなので、妊娠する可能性はゼロ。

しかも最初からないので、結婚しているのに処女なのは世界で私ひとりではないかと、暗闇に取り残されたみたいな絶望を感じる。

初夜のとき、斗真は気まずげに目を逸らし、なにもしなかつた。あのときは内心で首を傾げつても、疲れているのかもと思い、そつとしておいた。その後もこちらから優しい言葉をかけてみたが、彼が求めてくることはいつさいなかつた。

どうしてだろう。

私のなにがいけないのだろう。

一生懸命になつて笑顔を作り、場を盛り上げようと話題を振つて、料理教室に通つて美味しい食事を用意し、綺麗な奥さんでいるために外見にも気を配り、外で仕事をして家の中だけにいないようにして……

よき妻になろうと、あらゆる努力をした。

しかし斗真は変わらなかつた。彼が眉根を寄せて目を逸らすたび、徐々に自分の心がすさんでいくのがわかつた。夫は妻である私に向き合う気がないのだ。

結婚した頃は相手に好意を抱いていたはずなのに、灯火が消えるかのようにその気持ちがなくなるのが侘しい。

そうして辿り着いた答えが、目の前の離婚届だつた。

だけど斗真は、そんな私の懊惱なんて知るよしもなく、どうでもいいようなことを拾い上げる。

「食事に手をつけないわけじゃない。きちんと食べている」

「……完食しているということ？ でもすぐに食べないのは、どうしてなの？」

「それを説明すると話が長くなる」

「いいわよ。言つてみて」

「いや……まだその必要はない」

夫はきつぱりと言い切つた。

今、この場で言わなければ、いつ説明する機会があるというのか。

彼はいつもこんな調子だつた。かといって、私の苦悩をすべてぶつけるのは品がないし、なによ

りそんなことをしてもなんの意味もない。

溜息をこぼした私は左手の薬指から結婚指輪を抜き取り、薄い用紙の上に置いた。

「もうあなたと話し合おうとか、わかり合おうなんて思つていないわ。一度も夫婦の営みがないのが答えよね。父にはあとから言つておくから、これにサインしてちようだい」

彼が離婚届に記入してくれさえすれば、すべてが終わる。

こういう結論になつてしまつたけれど、私たちはただ縁がなかつたのだ。

これからは仕事のことだけを考えて、自分の心が穏やかに過ごせるよう生きていこう。斗真だつて離婚したほうが幸せになれるに違いない。

そう結論づけたのだが、斗真は離婚届に手を伸ばさなかつた。

なぜか、ちらと床に置いたビジネスバッグに目をやる。

仕事の書類でも入つてゐるのだろうか。こんなときなのに夫は仕事のことしか頭にならないらしい。

少しほは家庭の問題を真剣に考えてほしいものだ。

しばらく黙していた彼は、やがて強い眼差しでこちらを見た。

「由梨、待つてくれ。少し考えさせてほしい」

「……いつまで？」

「そうだな……。明日の夜までに、俺の答えを用意しておく」

「わかつたわ。明日ね」

私は頷いた。

彼にも心の準備が必要だろう。永久に考えさせてもらうと言われても困るので、念のため期限を訪ねたが、明日までならない。

差し出した離婚届はまだ空白だが、明日には書き込まれる。

私は結婚指輪を薬指に嵌め直すと、目の前にある薄い用紙を折りたたみ、それを手にして席を立つた。

「夕食は適当に済ませてね。私はいるから」

自分でも冷めていると思うけれど、明日離婚したら他人同士だ。もう料理を作らなくていいし、食卓をともにする必要もない。

斗真はテーブルから動かずにじつとしていた。この先どうするかを考えているのだろう。

彼が離婚を決断するのは明白だ。

だって引き留めたいなら、先ほど私にそう言つただろう。そもそも彼がこの結婚生活を継続していきたいと考えているのなら、なぜセックスがないのか、なぜ食事に手をつけようとしないのか、そしてなぜいつも眉間に皺を寄せて不機嫌そうにしているのか、といった数々の疑問に対しても答えられるはず。

すぐに承諾せず「考えさせてほしい」と時間をほしがつたのは、どうしたら離婚しても世間體を保てるか、もしくは会社の事業のためにどうすべきか、思案したかったからだろう。なにを考える必要があるのかと問いつめ、「おまえが嫌いだからだ」という最悪な答えを掘り出したこともない。どうせ私のことなんて初めから好きではなかったのだろうけれど。

また重い溜息をつき出した私は寝室へ入り、ナイトテーブルの引き出しを開ける。  
そこへ離婚届をしまった。

「明日には出番が来るわ。それまで眠つていてちょうどいい」

パタンと引き出しを閉じる。

つい物に話しかけてしまつたが、子じももペツトもおらず、仮面夫婦という寂しい日々を過ごしているうちにこんな癖がついてしまつた。

寝室には、夫婦のベッドがふたつ並んでいる。ひとりずつひとつずつベッドに寝る以外の使い方を、私は知らない。

結婚した頃は、セックスするときはどちらのベッドに行くのだろうなんて、胸をときめかせながら考えたこともあつたが、無用な心配だった。

寝室を別にすることも考えたが、大きめのベッドなのでほかの部屋に運ぶのは難しいし、寝室を出していくほうが別の寝床を用意するのも面倒で、そのままの状態で過ごしてきました。

私はかぶりを振り、二台のベッドから顔を背ける。

今夜だけ我慢して、身を焦がす苦悩を押さえ込めばいいだけ。

「そうよ。もうすぐ全部、終わるんだから」

明日は平日なので仕事があるが、退勤したら不動産屋へ足を運ぼう。

すでに新居にちよどい物件には目をつけていた。すぐに契約して、引っ越しの手配をすればいい。

これからは悠々と独身生活を謳歌するのだ。  
そう頭を切り換えた私は、入浴するためにバスルームへ向かった。

翌日、早朝に起きた私は身支度を整えると、会社へ出勤した。  
まだ早いのだけれど、昨日のことが気まずくて斗真と顔を合わせたくなかつたのだ。  
マンションから出ると、朝陽が眩しくて目を細める。

今日こそ、離婚する。

夜になつたら斗真が離婚届にサインするだろう。

クリスマスや誕生日などの記念日に合わせて婚姻届を提出するという話をよく聞くが、離婚するときもなんらかの日に合わせるなんて話は一度も耳にしたことがない。

つまりそれは、世の中の破綻した夫婦は、日取りなんてどうでもいいからすぐに離婚したいと思つてゐるという証拠だ。

今ならその気持ちがよくわかる。一刻も早く輝かしいはずの本来の自分の人生を取り戻したい。  
そして傷ついてばかりの自分の心を守りたい。ただそれだけ。

「今夜こそ、すつきりできるわ……」

私は独りごちながら最寄り駅まで歩く。

湾岸の新都心には、壮麗なタワーマンションが建ち並んでいる。港湾の隙間から見える海は風い  
でおり、陽射しを受けて光り輝いていた。通りかかった公園は初夏の緑に溢れている。

陰鬱な心を薙ぐような清涼な景色も見納めかと思うと、寂しく感じる。でも、明日からは幸せに向かつて歩み出せるのだ。

意識して口角を上げ、颯爽と脚を動かしていくと、五分ほどで駅に到着した。

グレーのパンツスーツにビジネスバッグを携え、早出の会社員の波に加わる。

電車を使い、整然とオフィスビルが建ち並ぶ都心の一角に辿り着いた。ここに私が勤める『株式会社ニトウデザイン』の社屋がある。

父が社長を務めているデザイン会社で、商業施設や店舗などの設計と施工を中心に、インテリアデザインにかかるすべてをサポートしている。

私は大学卒業後に入社して四年目になるインテリアデザイナーだ。

現在はヘアサロンの内装デザインを担当しているが、常に顧客の要望に沿つた丁寧な提案を心がけてゐる。

会社に到着すると、ほかの社員とともに玄関の自動ドアを通り、エレベーターに乗り込む。

近くのカフェで朝食を取つたので、ちょうどいい出勤時間になつた。

「おはようございます」

明るく挨拶して部署に入り、フロア内にある自分のデスクに向かう。

主任の湊靖子さんはすでにデスクについていた。

「おはよー、由梨さん」

長い髪を後ろに束ねた彼女は、パソコンを見つめながら片方の手にサンドイッチを持っていた。

いつもけだる気怠げな挨拶あいさつをするが、頼れる上司であり、私たちのチームリーダーもある。

ちなみに、私は職場のみんなからは名前で呼ばれていた。

今の姓は華僑院だけれど、会社では旧姓を使っている。でも社長と同じ苗字なので、社内では名前で呼んでもらっているのだ。

「由梨さん」にしようというアイデアを出したのは、主任の湊さんである。

たまたまチームのメンバーが名前のような苗字の人ばかりだつたため、私だけ名前呼びでも違和感がなかつた。

自分のデスクに着いてパソコンを起ち上げ、メールチェックを行う。

取引先からのメールに返信していると、隣から明るい声がかかつた。

「おはようございます、由梨さん」

「おはようございります、由梨さん」

「おはよう、カンナさん」

「おはようございます、由梨さん」

「えへへ。わたし、ついに彼氏ができそうなんです。見てくださいよ」

常に充電が満タンのスマホをタップしたカンナさんは、一枚の写真を表示してこちらに向ける。そこには居酒屋で撮つたと思しきカンナさんと、見知らぬ若い男性が映つていた。

「この人が彼氏候補？」

「嬉しそうね。なにかいことでもあつたの？」

「彼女は上機嫌でスマホを取り出すと、ケーブルにつないだ。

「えへへ。わたし、ついに彼氏ができそうなんです。見てくださいよ」

常に充電が満タンのスマホをタップしたカンナさんは、一枚の写真を表示してこちらに向ける。

そこには居酒屋で撮つたと思しきカンナさんと、見知らぬ若い男性が映つっていた。

「この人が彼氏候補？」

「はい、アプリで知り合つたんですけど、昨日で会つたのが三回目なんですよね。いい雰囲気だから、付き合えるかなーって感触です」

独身のカンナさんは、最近アプリで恋人を探している。

アプリでの出会いは条件や顔が初めからわかるので、効率がいいらしい。

政略結婚の私はカンナさんから話を聞くまでそういうふたアプリの存在すら知らなかつたが、自由に恋愛を楽しめそうな印象を受けた。

離婚したら、私もやつてみようかな……

そんな考えが一瞬頭を掠めたけれど、すぐに追い払つた。

なぜか斗真の顔が浮かんだから。

別に未練なんてないはずなのに、どうして離婚する夫のことが気にかかるのだろう。とにかくすべては離婚届にサインしてからだ。今はアプリで出会いを探そなて考えている場合ではない。

溜息をつきかけたが、それを押し込めて返事をする。

「いいなあ、恋してるので感じよね」

「由梨さんは素敵な旦那様がいるじゃないですか。うらやましいです。……つて、結婚式に招待されたときから百万回言つてますけど」

「あはは……結婚となると、いろいろと大変だから……」

「ですよね。早くわたしも誰かのたつたひとりの特別な人になつて、左手の薬指に結婚指輪を嵌めたいです」

写真を眺めながらカンナさんは理想を語る。

結婚する前の私とまったく同じ思考だ。

誰もが幸せな家庭を夢見て、相手を探し、結婚さえすれば幸せになれる信じている。離婚する夫婦が世の中にはたくさんいると知っていたはずなのに、なぜか結婚前は自分がそうなるなんて露<sup>つゆ</sup>ほども思わなかつた。

私は自らの左手の薬指をそつと見下ろした。

そこにはプラチナの結婚指輪がある。

結婚した当初はこれを栄光の証<sup>あかし</sup>のように思つていたが、今は違う。急に外して周囲になにかあつたと勘織<sup>かげ</sup>られても困るので、離婚するまでは外さないでいるつもりだ。

もともと、職場では斗真との不仲は話していない。

会社の経営にもかかわることなので、結婚を条件に斗真の会社と資本提携を結んだことも、初めから公<sup>おやけ</sup>にしていなかつた。

ゆえに斗真とは会社関係のパーティーで知り合い、プロポーズされたということになつていて。

実際にそれは嘘ではない。初めにパーティーで話しかけてきたのは、斗真のほうだつた。

社内で結婚生活について問われても、ずっと「結婚したら意外と大変」と言つて濁している。ほかの既婚者も同じことを言つているので、もしかすると誰もが似たような悩みを抱えているのかもしない。

苦笑いを噛み殺し、私はひたすらパソコンのキーボードを叩く。

ほかの社員も出勤してきて、席でそれぞれが業務を開始している。

そのとき、渋い顔をした湊さんが、まだスマホを見ているカンナさんを手招きした。

「ちょっと、カンナさん」

「なんでしょう、主任」

スマホを置いたカンナさんが、湊さんのデスクに向かう。

「シーリングライトの件についてはどうなつてるの？ 依頼主に何点かプランを提案するわけだけ<sup>ど</sup>、もう企画書はできた？」

「あつ……まだです。今から見直して、すぐに提出します」

頭を下げたカンナさんは、そそくさとデスクに戻つてきた。

インテリアデザイナーの仕事は、家具や建築、素材に関する知識はもちろんのこと、創造性や汎用性も求められる。完成した図面をもとに依頼主とディティールを詰め、施工業者と打ち合わせをしてデザインの監理も行うため、とてもやりがいのある仕事だ。

湊さんはチームリーダーとして、私とカンナさんを含めた六名で今回の案件を請け負つていた。必死にパソコンに向かっているカンナさんの隣で、私は素材のサンプルを発注することにした。途中で電話対応をしつつ、ようやく発注作業を終える。

「由梨さん……この企画書なんですか？ ちょっと見てもうつていいですか？」

不安げなカンナさんに声をかけられたので、隣のパソコンを覗き込む。

普段は優しい湊さんだが、仕事となると何度もリテイクを出すからだ。

「どれどれ……」

企画書を読み込んでいた、そのとき。

電話を取つた湊さんが、不穏な雰囲気を醸し出していることに気づいた。

「えつ？ ええ……華僑院はいますが……はい、はい……そうですが、どういったご用件でしようか」

私の苗字が出たので、じきりとする。

湊さんの対応を見ると、電話の相手は顧客ではなさそうだ。なにやら深刻そうだけど、いつたいなんだろう。

すぐに湊さんは「少々お待ちください」と伝えて受話器を置いた。彼女はわざわざ席を立ち、私のそばにやつてくると、身を屈めて囁いた。

「由梨さん、警察から電話よ。旦那さんのことで」

「……えつ」

私は一瞬硬直した。

——警察？

警察から会社宛てに電話がかかってくるなんて、只事ではない。しかも内容は斗真にかかることらしい。どういうことなのだろうか。

すぐに私はデスクの受話器を取つた。

「もしもし、お電話代わりました。……ええ、私が華僑院由梨ですが……」

電話の相手は湾岸警察署の巡査だと名乗つた。自宅近くのエリアを管轄する警察官らしい。

彼は私の名前を確認したあと、淡々と述べる。

『ご家族の華僑院斗真さんが、交通事故に遭われました。現在、湾岸総合病院の救急外来に搬送されています』

「えつ!? 交通事故……ですか？」

息を呑んだ私に呼応するように、部署内が静まり返る。カンナさんやほかの社員も手を止めて、こちらを見守つていた。

警察官の説明によると、免許証と車検証の住所から自宅の電話番号を照会して連絡したものの、誰も出なかつたので、免許証が入つていたケースから私の名刺を見つけて会社に電話をかけたといふ。

「それで……夫の怪我はどんな感じなんですか？」

斗真は車で通勤しているので、車の衝突事故だと思われるが、彼は無事なのか。命はあるのか。

焦りを覚えて声が震え、受話器を持つ手に力が入る。

『処置中のため、警察のほうでは現時点の詳しい容体はわかりかねます。すぐに病院にお越しください』

「わかりました。すぐに行きます」

受話器を置いたときにはすでに腰を上げていた。

慌ただしくバッグを手にした私は、後ろに立つていた湊さんにたどたどしく伝える。

「あのつ、夫が交通事故に遭いまして、病院に……」

「わかつて いるわ。すぐに行つて ちようだい。社長にはわたしからも言つて おくから、あとのこと は任せて」

今は、父は現場に赴いているので会社にはいない。

とにかく妻である私がすぐに病院へ向かい、斗真の様子を確認しなければならない。

心配 そ う に 表情を曇らせて いる 社員たちに仕事を任せて、私は急いで会社を出た。

湾岸総合病院にタクシーで到着すると、すぐに救急入口へ駆け込む。

受付で事情を伝えると、待合室に通された。平日の昼間のためか、救急外来は閑散としていて、待合室には私ひとりしかいない。

事故の規模すらまだわかつて いないので、不安が募る。

待合室の硬いソファに座り、ひとまず斗真の実家に連絡を入れた。義母は驚いた様子で、すぐに病院へ向かうとのことだった。斗真の父親は華僑院グループの会長で多忙な人なので、会社に電話を入れるべきか少し悩む。

そのとき、処置室のドアを開けて看護師が出てきた。

彼女は私に目を向けると、柔らかな声をかける。

「華僑院斗真さんのご家族の方ですか？」

「はい、そうです。妻の華僑院由梨です」

「奥様ですね。ご主人はこちらにいます。処置は終わっていますので、先生からお話を聞いてください」

「はい……」

看護師が落ち着いた口調で話しているが、それが逆に恐怖心を煽る。

どれほど の 怪我なのだろうか。意識はあるとい うことな のか。処置が終わつたとい うこと は、骨折な のか。ともかく今から斗真に会えるので、自分の目で確かめるしか ない。

どきどきしつつ、案内されて処置室のひとつに足を踏み入れる。

狭いその部屋はパーティションで仕切られており、壁際にデスクがあつた。反対側には救急用のベッドが設置されている。そこに毛布をかけて横たわっていた斗真は、青白い顔をして目を瞑つていた。

静かに眠つているような彼の顔を見た途端、込み上げてくるのを感じ、声が震える。

「と、斗真……」

眦に涙が滲みかけた、そのとき——声に反応した斗真が、薄らと瞼を開けた。

そしてぼんやりしている様子でこちらを見た。

「あれ……由梨さんじやないか。どうしてここに？」

夫の穏やかな声に、私は目を瞬かせた。

命に別状はなさそ う だし、重傷とい うわけでもないよう に見える。

「どうしてつて、あなたが交通事故を起 こ したと聞いたから駆けつけてきたのよ」

「ああ……そうなのか。俺は事故を起こしたんだ……よく覚えてないな」

まだ朦朧としているから、事故当時の記憶が曖昧になつてているのだろう。

意識はあるし、激痛というほどの痛みもないようだ。命にかかる状態ではなかつたと知り、私の胸は安堵感に包まれる。

「無事でよかつたわ。大怪我したかと思ったのよ」

「いや、大丈夫だ。大怪我なんてしたら、結婚式がキャンセルになつてしまふからね」

「……えつ？」

私は再び、ぱちぱちと目を瞬かせた。

結婚式をキャンセル……？

まるでこれから誰かと結婚するかのように聞こえたが、どういうことなのか。

確かに私たちは離婚する予定ではあつたけれど、まさか斗真には愛人がいて、その人と結婚するつもりだつたのだろうか。

驚愕のまま、私はベッドに横たわつて、彼を見下ろした。

「……誰と、結婚式を挙げるの？」

「もちろん由梨さんとだよ。この前、式場を見学しただろ？」

「……は？」

なにを言つてゐるのだろう。

確かに結婚式を挙げる前に式場見学をしたが、それは一年以上前の話だ。

それに彼はなぜ、さつきから私を「由梨さん」と呼ぶのか。

やたらと他人行儀である。いつもは「由梨」と呼び捨てなのに。首を捻つた私は、ひとまず疑問を口にすることにした。

「もうとつくに結婚式は終わつたけど」

「えつ？」

今度は彼が驚いたように目を瞬かせた。

その反応に、さらに混乱が深まる。

「どういうことだ？ 結婚式は終わつた……ということは、俺たちはすでに結婚しているというのか？」

「結婚して一年経つてゐるけど……覚えてないの？」

私の言葉に、斗真は信じられないといった顔で息を呑んでいた。

「俺と由梨さんが結婚して、一年も経つてゐるだつて……？ どういうことなんだ。まったく記憶ついたが動いてしまつたのだ。

「私たちが結婚している間のことを忘れたの？」

「忘れたといふか、どうして時間を飛び越えているのか不思議なんだが」

私は眉をひそめて思わず彼の額に手を当てたが、平熱だつた。

そんなことをしなくとも、とうに看護師が確認済みなのだが、どうにも斗真の態度がおかしくて、つい体が動いてしまつたのだ。

「私たちが結婚している間のことを忘れたの？」

彼の言い分に呆気にとられる。

まるで未来へやつてきた人みたいなことを言つてゐる。そんなことがあるわけがない。  
「……今日が何年の何月何日か、わかる？」

まるで未来へやつてきた人みたいなことを言つてゐる。そんなことがあるわけがない。  
「……今日が何年の何月何日か、わかる？」

ぴつたり一年前ではなく少々ずれがあるところが、逆に彼が嘘や冗談を言つてゐるのではないかと  
思えた。それに斗真が告げた年月日は、確かに結婚式の少し前の日付だ。

現在の住所や自宅の電話番号も訊ねてみると、いずれも実家のものを答えた。私たちが結婚して  
からの住まいはいつさい記憶にないようだ。

本当に彼は一年分の記憶を失つていて、私と結婚する以前のことまでしか覚えていないらしい。

「もしかして、事故のときに頭を打つたんじゃない？」

事故の衝撃で、一時的に記憶が混乱しているのかもしれない。斗真は事故のこともほとんど覚えて  
いないようだし、その可能性はある。

「よくわからないが、頭は痛くもなんともない。どうしてここにいるのかと思つたけど、事故を起  
こしたから病院に運ばれたんだな。とにかく帰るよ」

身を起こした斗真は毛布を剥がした。

もしも頭を打つたのなら、すぐに動いてはいけないのではないか。

「待つて、急に動いたら危ないわ」

慌てて止めたそのとき、パーテイションの向こうから白衣をまとつた男性医師が姿を現した。

「どうですか、華僑院さん」

「なんともありませんので帰ります」

「奥様にも検査結果をお知らせしますので、そのままベッドにいてくださいね。——奥様、こちらにどうぞ」

「医師に促されたので、そばにあつた丸椅子に腰かけた。斗真はベッドの上で呆然として「奥  
様……」とつぶやく。私が妻であるという事実に驚いているらしい。

デスクについた医師は、シャウカステンにかけられて仄かに光つてゐるレントゲンの画像を見つ  
めて口を開いた。

「交通事故に遭われたということで、こちらに救急搬送されました。外傷はありません。CTの結  
果も異常ありませんね。本人の意識もしっかりしていますから、お帰りになつてけつこうです。も  
し帰宅してから気分が悪くなつたり嘔吐わうとしたりしたら、すぐに救急外来に来てください」

事故に遭つたのにまったく怪我がなく、このまま帰つていいなんて奇跡だ。

しかし、気になることがある。

斗真は一時的に記憶を失つてゐるのではないか、ということだ。

ちらと彼に目を向けながら、私は医師に問いかけた。

「あの……夫が私のことを覚えていないようなのですが……いえ、正確には結婚した一年間のこと  
を忘れてしまつたみたいなんです」

「なるほど。一年以上前のことは覚えているんですか？」

「そうみたいです。もしかして頭を打つたんじゃないでしょうか」

私の言葉に動搖を見せらず、医師は斗真に目を向けて。

「華僑院さん。ご自分のお名前と年齢、家族構成を教えていただいてもよろしいですか？」

「華僑院斗真、二十八歳。株式会社カキヨウインホールディングスに勤務していて、家族は父と母、弟は大学生。それから仁藤由梨さんと婚約中で、来月に結婚式を予定しています」

「ほら、やっぱり。今の夫は二十九歳なんです。それに結婚したのはもう一年前です」

「この一年間で、ご主人に大きなストレスがかかるような出来事がありましたか？」

医師の質問に、私は口を噤んだ。

大きなストレスは……あつたのかもしれない。たとえば、家庭が離婚の危機にあるだとか。

うつむいた私を見た斗真是、不思議そうに目を瞬かせている。

「……あつたかもしれない。仕事が忙しいので……でも、忘れたきつかけは事故だと思うんですけど……」

まさか今夜離婚する予定だつたとは言えず、私は口ごもる。

医師はパソコンのキーボードを叩きながら落ち着いた口調で述べた。

「事故のショックにより記憶が混乱しているといつたことも考えられます、わたしの専門は心臓ですでので、精神科の受診をお勧めします。うちには精神科もありますから、予約を取つておきま

すね」

もしかしたら、斗真は離婚について悩んでいたのだろうか。事故に遭つたのは、それも関係しているのかもしれない。

そうだとしたら、私にも責任がある。思い返してみると、昨夜は一方的に言い過ぎたところもあつた。

結局、一年間のみの記憶が抜け落ちているだけで日常生活に支障はないということで、今日はこのまま帰宅して、のちに通院という形になつた。私は医師に礼を言い、立ち上がる斗真に手を貸して処置室を出た。

彼の腕の温かさに、なぜかほつとする。関係の冷めきつた相手ではあるけれど、命にかかるほど傷ついてほしいわけではないのだ。

そういえば、こんなふうに斗真に触れたのは初めてかもしれない。

だけどそんなことを知らないであろう斗真は、朗らかに微笑んでいる。

「大丈夫だよ。どこも痛くはないから。由梨さんには心配かけたね」

「ううん、いいのよ。入院や手術なんてことにならなくて、よかつたわね」

待合室に戻ると、制服の警察官が待機していた。会社に電話をくれた湾岸警察署の巡査だろう。

事故処理を行うために一連の出来事の確認が始まつた。

斗真の運転する車が道路脇の電柱に衝突し、自損事故を起こした。事故当時は斗真の意識が朦朧<sup>もうろう</sup>としていたため、事故の目撃者が救急車を呼んだという。

自損事故なので物損のみで済み、こちらの怪我もなかつたから処理はすぐに終わるらしい。ただ

事故車両が現場に残つたままなので、保険会社か業者に連絡して早期にレッカー移動することを求められた。

警察が用意した書類を記入していると、待合室に斗真の両親が入ってきた。

威風堂々としていて恰幅のよい義父と、柳のように細く淑やかな雰囲気の義母の組み合はせは、いつ見ても威厳がある。

「斗真！　おまえ、事故に遭つたと聞いたが、なんどもないのか」

駆け寄ってきた義父は、斗真の肩を両手で掴んだ。

義母が義父の会社に連絡してくれたようだ。

だが、斗真は平然とした様子でさらりと答える。

「ああ。救急車で運ばれたけど、怪我はないんだ。検査の結果も問題ない」

「なんだ、人騒がせだな。母さんの話では意識不明だと言うから、覚悟していたんだぞ」

安心したのか、義父は非難めいた視線を義母に向ける。涙を目に浮かべた義母は、ハンカチを口元に当てた。

「だつて交通事故に遭つたなんて聞いて、気が動転したのよ。まだ孫の顔も見ていないのにどうしようつて。でも無事だつたみたいで安心したわ」

孫の顔——という単語に、ちくりと胸を刺される。

義母には悪気はないのだろうけど、定期的に「孫はいつ生まれるのか」と聞かれては、胸の奥を抉<sup>え</sup>られてきた。まさか、初夜すらないので永久に生まれませんとは言えない。

「いつものように私が唇を引き結んでいると、斗真が小首を傾げる。

「孫の顔？……ああ、そういうえば俺と由梨さんはもう結婚しているんだつたな。彼女から、結婚して一年が経過していると聞いたよ」

義両親は目を瞬かせた。息子がなにを言つているのかよくわからない、といった表情をしている。私も斗真の脳内がどうなつているのかわからない。

斗真は私に目を向けて、言葉を継ぐ。

「ということは、俺たち夫婦にまだ子どもはいないんだな」

私は無言で頷いた。

初めて斗真の口から「子ども」という単語を聞いた。初夜がないので、そこからつながる子どものことなんて私たちの間で話題に上らないからだ。

彼が一年前の世界からトリップしてきた斗真でないとしたら、記憶喪失なのは間違いないと思えた。

義父は息子の違和感に気づいたらしく、眉をひそめる。

「おまえ、なにを言つてるんだ？　なんだかいつもと違うというか、妙だな」

「あの、斗真は事故のショックで記憶が混乱しているみたいなんです。少し休養して様子を見てみます」

私がそう言うと、はつとしたような顔をして義父は大きく頷いた。

義母は心配そうに斗真を見て口を開く。

「そうよね。大変な目に遭つたんだから、まずは休まないといけないわ。実家に来る？」

「いや、いいよ。俺たちの住んでる家があるはずだから、そこに戻る」

「それでも斗真の奇妙な発言に、義両親は顔を見合わせた。

当然のことを推測する言い回しをしているので、違和感を覚えるのだ。一年間の記憶を失つてゐる斗真としては、昨日まで住んでいたマンションも知らないという認識になつてゐるはずだ。

私の背に軽く手を添えた斗真は、呆然としている両親に告げた。

「それじゃあ、また。事故のことは会社で公にしないでくれ。仕事についてはこちらから秘書に連絡しておく」

そつなく事後処理について語る斗真に、義父は「ああ……わかつたが……」とつぶやく。一年前も斗真是華僑院グループの会社社長だったので、仕事のことだけは以前のままの認識のようだ。

記憶喪失というと、当人が一番混乱しているイメージがあつたが、斗真にそんな様子はない。事故なんてなかつたかのごとく、爽やかに微笑んでいる。

「俺たちの家に案内してくれるかな、由梨さん」

「え、ええ……そうね。マンションの場所がわからないんだものね」

「新居はマンションなんだね。どんな部屋なのか楽しみだ」

屈託のない彼の笑顔に、不覚にもどきんと胸が高鳴る。斗真のこんな笑みを見るのは初めてではないか。

なんだか今までの夫とは違うような感じがする――

私はそわそわと落ち着かない気持ちになりながらも、斗真とともに救急外来の自動ドアをくぐつた。

私たちはタクシーで、湾岸沿いに建つタワーマンションの自宅に帰つた。

コンシェルジュデスクの前を通り、エレベーターホールへ向かう。斗真是物珍しげに周りに目をやりつつ、私の少し後ろをついてきた。

ふたりでエレベーターに乗り込み、私が最上階のボタンを押す。

「最上階なんだね。眺めがよさそうだ」

「……そうね。斗真が選んだ部屋なのよ」

「へえ」

まるで初めて自宅へ行くみたいな感想だが、それもそのはずだ。彼は一年間の結婚生活をなにひとつ覚えていないのだから。

斗真の左手の薬指には、私のものとお揃いの結婚指輪が嵌められている。

昨夜も斗真是自分の指輪を外していなかつた。常につけてるので、頓着していなかつたのだろう。

「俺がここを選んだつていうのも納得するな。由梨さんとの新婚生活を送るなら、やっぱりセキュリティがしつかりしていて、見晴らしのいいところが一番だからね」

そんな理由があつたとは知らなかつた。このマンションは華僑院グループが手がけた物件なので、

彼の会社も施工にかかわっているとは義父に聞いたことがあつたけれど。

斗真是婚約当時から饒舌なほうではなかつたので、彼の考えを初めて聞いた気がする。ふつうの夫婦はこんなふうに会話をするものなのかもしれない。

昨日まではなにを言つても否定していたのに……変な感じがするわ……

エレベーターを降りた私たちは瀟洒な廊下を通り、自宅の扉を解錠した。

今日は離婚するために家に帰る予定だつたのに、まさかこんな状況になるなんて夢にも思わなかつた。

私は先に玄関に入り、斗真を案内する。

「廊下の向こうがリビングよ。お手洗いはそこだから」

「うん。マンションの間取りは見慣れているから問題ないよ。俺は今でも不動産部門なんだろう?」

「そうね。一年前も今も、斗真是華僑院グループの不動産会社の社長よ」

ふたりでリビングに入ると、窓辺に近寄つた斗真是陽射しを撥ねて煌めく海を眺めた。  
「そういえば、ここはうちの会社が手がけた物件なんだ。この部屋に住めたら素敵だと思ったから、俺はこの部屋を新居にしたんだと思う」

「えっ、思い出したの!」

「いや、その辺りの記憶だけだね。最近のことはまつたく覚えていない」

「そう……」

このマンションが建設されたのは一年以上前で、私たちが結婚するより昔のことだ。

やはり彼は一年分の記憶だけが抜け落ちているらしい。  
ソファに腰を下ろした斗真是、スマホを取り出した。

「とりあえず事故車のレッカーを頼まないとな。保険会社の連絡先は……」

斗真是保険会社に電話をかけた。彼の車は結婚前から乗つていたものだが、全壊してしまつたのであれば廃車にするしかないと。でも、

私も会社へ連絡する必要がある。そのままバッグを抱え、ダイニングキッチンへ入つた。  
スマホを手にしてダイニングテーブルの自分の席に着くと、ふと昨夜のことを思い返す。  
ここで斗真に離婚を切り出した。

今夜には離婚が成立するものと思い込んでいたけれど、それどころではなくなつてしまつた。なにしろ斗真是結婚したことすら覚えておらず、私たちが不仲だったのも知らないのだ。

離婚するには、まず夫の記憶を取り戻さなければならない。今夜記入予定だつた離婚届の出番は先になりそうだ。

なんだか、ややこしい話になつたわ……

会社に電話をかけた私は、主任の湊さんに事情を話した。事故を起こしたもののは自損で、たいした怪我はなかつたこと。入院の必要はなく、今は自宅に戻つてきしたことなどを手短に伝える。もちろん、記憶喪失の件は伏せておいた。

余計な心配をさせてしまうし、本当に記憶喪失かどうかは精神科の診察を経ないと確定しないからだ。内心ではまだ、彼は過去からタイムスリップしてきたのかもしれないという荒唐無稽な疑念

が拭<sup>ぬぐ</sup>えていない。

湊さんは、「みんな心配してたわよ」という言葉とともに、明日は有休を取ることを勧めてきた。斗真は頭を打った可能性があるので、少しの間は異常がないか様子を見たい。彼も数日は養生するため会社を休むだろうから、せめて明日だけは私も一緒にいよう。

湊さんの申し出を快く受け、礼を述べて電話を切る。

一息ついた私は、コーヒーでも淹<sup>い</sup>れようと思い、席を立つた。

「コーヒーメーカーをセットすると、リビングから斗真の話し声が聞こえた。

「真鍋か。……うん、大丈夫だ。病院から家に戻つて。……そうだな、数日は休む」

保険会社のあとは、会社の秘書と話しているようだ。

秘書の真鍋さんは何度か会つたことがあるが、体躯のよい男性だった。もちろん真鍋さんだけではなく、会社には補佐をする女性の秘書もいて、もしかしたら斗真はその秘書と浮気しているのかも、なんて疑心暗鬼になつた時期があつた。

だけど真偽はわからないままだ。問い合わせるのもどうかと思い、はつきりと斗真に確かめていない。

浮気相手がいるから私とセックスしないのではないか、と思うのは自然な流れだ。もしも斗真が愛人と知り合つたのが一年以上前なら、その人のことは忘れないわけだけれど……

斗真是記憶を失つたことなんてなかつたかのよう滑らかに話している。

私はふたつのコーヒーを淹れると、リビングに持つていつた。

「今進行している鎌倉のマンションだが……えつ、二か月前に終わつた？　ああ、そうか。いや、俺の思い違いだ。事故の影響かわからないが混乱した。……そうだ、頼んだぞ」

電話を切つた斗真は嘆息を漏らしつつ、スマホをテーブルに置く。

コーヒーを差し出すと、すつと彼は自然に受け取つた。

「ありがとう」

爽やかな笑みを向けられ、どきん、と私の胸が音を立てる。それとともに、結婚したばかりの頃の淡い気持ちも湧き上がつた。

思い出した。あのときの私は確かに、斗真に對して好意を抱いていたのだ。

けれど、それは一年前の結婚当初のことだ。

そもそも、斗真とこうして物を受け渡ししたことなんてあつただらうか。

私の心の内などまつたく知らないであろう斗真は、品のある仕草でコーヒーをひとくち飲んだ。

「どうやら俺は仕事のことも含めてすべて、一年間の記憶を失つているようだ」

「そうなのね。でも、真鍋さんのことは忘れてないんでしょう？　それならどうにかなるんじやないから」

「真鍋とは俺が入社したときからの付き合いだからね。もとは親父の秘書だった男だ。仕事は少し休むことにしたよ。その間に記憶が戻るといいけどな」

「ええ……そうよね。だつて、昨日のことも覚えていないのよね？」

斗真是今夜、離婚についての答えを出すはずだつた。だけどそれも覚えていないのなら、結論は

先送りになる。

彼がなんと言つもりだつたのか知りたかつたので、私は念のため確認したのだ。  
すると不思議、そうに目を瞬かせて斗真が訊ねる。

「昨日？ なにかあつたのか？」

「えつと……ちよつとしたことで喧嘩したから……斗真がなんて言うのか気になつて……」

なにも知らない今の彼に、まさか「離婚するつもりだつた」とは言えずに誤魔化す。

神妙な顔をした斗真は、音もなくコーヒーをテーブルに置いた。

「だから、由梨さんは座らないでずっと立つていたのか」

「えっ？」

なにを指摘されたのか咄嗟に理解できず、私は固まつた。

斗真にコーヒーを渡してから、私はずつと自分の分のカップを手にしてソファのそばに立つてい  
た。そうするのが私たち夫婦の距離感だつたから。

斗真の隣に座るなんていう選択肢はこれまで存在しなかつた。私はダイニングテーブルに戻り、  
ひとりでコーヒーを飲むつもりでここに立つていたのである。

だけど結婚生活のすべてを忘れていた斗真は、昨日私たちが喧嘩をしたから離れていると解釈し  
たらしい。

彼に言われて、これまでの私たち夫婦がいかに心も物理的な距離も離れていたのかを自覚した。  
ソファから立ち上がりつた夫は、私の背にそつと触れてソファに座るよう促す。

一緒に座りたくない、なんて拒否することもないので、彼とともにソファに腰を下ろした。  
なにしろ彼は記憶喪失なのだから、余計なことを言つて混乱させるのもよくない。

斗真是優しげに双眸を細めて、私を見つめた。

「喧嘩の原因がなにか思い出せないけど、俺が悪かつた」

「えつ……」

私はコーヒーカップを持ったまま呆然とした。

こんなにあつさり謝るなんて、これまでの斗真にはなかつた言動だ。まるで別人のようである。

しかも彼の眼差しには熱が籠もつていた。そこに愛しさのかけらを見出し、どきんと胸が大きく  
音を立てる。

え……どうして、こんな気持ちになつてるの？

斗真と見つめ合うだけで、鼓動が全身を駆け抜けていく。彼にときめきを覚えるなんてありえな  
いと思っていたのに、突然の心の揺らぎに戸惑いが湧き上がる。  
端整な顔がゆつくりと傾き、近づいてきた。

吐息がかかるほどの距離から、斗真是甘さを含んだ低い声で囁く。

「キスしてもいい？」

硬直した私はごくりと唾を呑み込んだ。初めてそんなことを訊ねられたので、どう返答していい  
のかわからぬ。

だけど初めてのキスの予感に、鼓動が早鐘のごとく脈打つていて。

「……どうしてそんなことを聞くの？」

「きみに嫌われたくないからだよ。でも俺たちは夫婦なんだから、許可はいらなかつたな」  
チユツと頬に熱い唇が押し当てられ、私は瞳目した。動搖のあまり、びくんと肩を揺らす。  
その拍子に、手にしていたカップから熱いコーヒーがこぼれた。

「あつ……つ」

はつとした斗真はすぐに私の手元を見た。

彼はコーヒーを丁寧に、けれど迅速に私の手から奪うと、それをテーブルに置いた。  
すまなかつた。すぐに冷やそう

私の手を取り、斗真は心配そうな顔で言う。

少し飛沫がかかるだけなので、火傷するほどではない。それに彼が悪いわけではなく、私が

コーヒーカップを持った今までいたのがいけなかつた。

肩を抱かれてキツチンへ連れていかれるが、斗真は私の手首を離さない。

「平気よ。びっくりしただけだから」

「いいや。きみのきめ細かい肌に火傷の痕がついたら大変だ。流水で冷やしてから様子を見よう」  
掴んだ手首をシンクに差し出し、斗真がレバーを引いた。私の指先に冷たい水が当たる。

彼の真剣な眼差しは、私を心から心配しているように見えた。

こんなふうに大から気遣われたことがあつただろうか。

もつとも結婚してからは、お互に大きな怪我や病気をしていないので、看病するような状況には

ならなかつた。料理をしていて指先を少しだけ切つても、小さな出来事なので私は黙つていた。

水の流れる音が静かなキツチンに響く。

真摯な目で私の指先を見つめる斗真を、どこか不思議な気持ちで眺めた。

この人はいつたい誰なの……本当に斗真なの？

しばらく流水に浸していたせいか、体が冷えてぶるりと震えた。それを見た斗真はようやくレバーを押して水を止める。

彼は私の手を、大切なものを扱うみたいに丁寧にタオルで包んだ。

「患部は赤くなつていないね。よかつた」

「たいしたことないわよ。大げさんんだから」

照れくさくて、ついそんなことを言つてしまふ。

斗真は私の手をタオルごと握りしめたまま、真摯な双眸を向けてきた。

「由梨さん、俺を許してくれる？」

低い声で許しを請われ、また心臓が跳ねる。

まるで今まで妻を蔑ろにしていたことを許してほしいと言つているように聞こえた。そんなはずないのに。

手を引こうとしたけれど、強い力で握られているわけでもないのに振りほどけない。

「許すもなにも、斗真が悪いわけじゃないわ。私がカップを持ったままだつたから――」  
「そのことじゃなくて、喧嘩したのを許してくれるかと聞いたんだ」

「あ、ああ……そつちね」

キスされる直前に、昨日の夜に喧嘩したのだと誤魔化していたことを思い出す。

実際は喧嘩ではなかつたわけだが、今はそういうことにしておくしかない。

ちら、とダイニングテーブルを見やつて、私は内心で安堵する。

離婚届をしまつておいてよかつた。

明日使うのだからとテーブルに置いたままにしていたら、今頃なにを言われていたかわからない。結婚しているのを忘れているところに、離婚しようとしていたなんて聞かされたら、彼が混乱するのは必至だろう。

離婚について話したら記憶が戻る可能性も考えられるが、ではそれで離婚の協議が進むかと言われたら、そうは思えない。

なぜなら私たちは幸せな夫婦生活を営めず、離婚する段階になつてもスムーズにはいかなかつた。話し合いさえすれば物事は解決できるわけではないと知つていてるからだ。

それに、斗真が事故を起こしたのは離婚について悩んでいたからかもしれない、ということもある。

専門的なことはよくわからないけれど、医師は斗真に大きなストレスがなかつたかと訊ねていた。再び斗真に刺激を与えて、さらに精神的ダメージを受けるなんてことになつたら、今度こそ大きな事故につながりかねないという懸念もあつた。

脳にストレスを与える、穩便に記憶喪失の症状を回復させなければならない。

そのためにも、離婚のことは彼の記憶が戻つたタイミングで再び切り出すか、もしくは徐々に思い出してきたら少しずつ話すという流れにするべきだろう。

そんな私の考えなどなにも知らない斗真は、つと後ろを振り向いて私の視線の先を確認する。そこには空のダイニングテーブルがあつた。

「どうかした？」

眉をひそめて問い合わせられ、ぎくりとする。

「べ、別に」

「もしかして、昨日の夜に俺たちが喧嘩した場所はそこだつたの？」

「……えつと」

「ちよつとしたことだそ�うだけど、具体的にはなにがあつたんだ？」

「……それは、その……」

背に冷や汗が滲む。

昨日までは斗真が私の問い合わせに対して答えなかつたのに、今は完全に逆転している。

なにかそれらしいことを言つてかわさなければと思うほど、喉が痛えたように言葉が出てこなくなる。なにしろ斗真は説しげな顔をして、私の答えを待つていてるのだ。

澄み切つた瞳でこちらを見つめる彼からの圧迫感を前にしたら、誰でも石像のごとく固まつてしまうだろう。

「ちよつとしたことなら、言つても差し支えないと思うけど。俺たちは夫婦なんだろう？ 遠慮な

く、なんでも話してほしい」

「そなんだけど……」

「俺が由梨さんにひどいことを言つたとか？」

「えつと……そ、うじやなくて……その……」

どうしよう。なんて言えばいいのだろう。

彼が納得できて、かつ記憶喪失の症状に影響を与えない内容にしないといけない。しかし、すべてを嘘で固めるわけにもいかない。あとから矛盾を指摘されたら、私が混乱するのは間違いないからだ。

しばらくは離婚のことを隠さなければならないのだから、少なくとも私たちが不仲だった事実は伏せておきたい。

そんなふうに考えていると、突然体が温かなものに包まれた。

ぎゅっと、逞しい腕の中に抱きしめられている。

えつ……なに、これ……

斗真に抱きしめられたことがなかつたので、驚きすぎて呆然としてしまう。

彼がこんなふうに愛情表現を示したことは一度もない。

「ごめん。無理に言わせたいわけじゃない。俺はただ、由梨さんとなにがあつたのか知りたかっただけなんだ。せつかくみと結婚できたのに、それをひとつも覚えていない自分が歯がゆいよ」夫が切々と自分の気持ちを話してくれたのも初めてかもしれない。とてもわかりやすく、彼の

想いがしつかり伝わってきた。

今彼は斗真であつて、斗真ではないのだ。もはや別人と考えたほうがいいのかもしれない。だからこそ、無事に記憶を取り戻さなければならない。

「いずれ、記憶は取り戻せるわ。焦らないでゆっくり思い出していつたらいんじやないかしら」「そうだな。由梨さんがいてくれるだけで俺は幸せだから。すでにきみと結婚してるって聞いたときは驚いたけど、すごく嬉しかった」

「……そ、うなのね」

今彼が素直なのは、元來の性格がそうだったということか。ならば少なくとも一年前までの斗真は、私との結婚を心から望んでいたのだろう。

ということは、夫が冷たくなつたのは、私の態度にも原因があつたのだと気がつく。

確かに、私も意固地になつていていた面があつた。でも、夫から冷たくされ続けたらそうなつてしまうのも仕方ないだろうと思う。

抱擁を解いた彼は、そつと私の肩を両手で抱いて間近から見つめてきた。

こんなに近くから夫の顔を見たことがないせいか、その美しさに胸の高鳴りが止まらない。

どうしてこんなに彼にときめいてしまうのだろう。

私はその戸惑いを押し隠すように、斗真を促した。

「少し休んだらどう？ 私は片付けや夕食の準備をするけど、家にいるから心配しないで。具合が悪くなつたらすぐに言つてね」

「わかった。由梨さんを心配させないよう、ソファでおとなしくしてるよ」

そう言うと、斗真はするりと私の肩から手を離す。

見つめ合つたときに一瞬だけ生じた甘い気持ちは、見ないふりをした。

やがて陽が暮れて、夜の帳が下りる。

夕食の時間が近づいてきたので、私はいつもどおりに食事を作つた。

もう作らなくてもいいはずだったが、夫の記憶が戻るまでは円満な夫婦を演じる必要がある。

ところがいつも眉間に皺を寄せて料理を凝視していた斗真が、今日は違つた。

「おいしいよ。由梨さんの手料理を食べられるなんて俺は幸せだな」

顔を綻ばせながら箸を運ぶ斗真を、逆に私が凝視してしまつた。

夫が、朗らかな笑みを浮かべながら妻の手料理を食べている。

当たり前のはずの光景だが、昨日までの我が家はそうではなかつた。まさかこんな日が突然訪れるとは夢にも思わず、変貌した夫から目が離せない。

箸を手にしたまま固まりつつ、私は答えた。

「そ、そ、ようかつた……簡単なものでごめんね」

冷蔵庫にある食材で麻婆豆腐を作つたのだが、これは何度も夕食に出したことがある。斗真が食べるのには初めてではない。記憶を失つている今は、私が作つた麻婆豆腐を初めて食べたということになるわけだが。

斗真是きらきらした目で、まっすぐに私を見た。

「簡単なんてそんなことはないよ。由梨さんは今もお義父さんの会社で働いてるんだろう？ それなのに毎日こうして手料理を作つているのか？」

「ええ、そうね。残業があるときはお総菜で済ませるときもあるかな」

一年間も同居していた夫から日常生活について訊ねられるなんて、非常に滑稽である。

首を捻りそうになるたびに、彼は記憶喪失のだからと心の中で自分に言い聞かせた。

斗真是麻婆豆腐を匙で掬い、形のいい唇に運んでいる。さらにご飯と味噌汁も品のある所作ですべて平らげた。

お新香にまで箸をつけている彼の一舉一動を、私は見つめる。

ようやく斗真が私の手料理を食べててくれたという達成感みたいなものが胸に湧いていた。

今までも食べなかつたわけではないけれど、目の前で美味しそうに食べるところを見るなんて初めてだつたのだ。

その感動とともに、信じられない光景を目の当たりにした私の箸は、まつたく進んでいない。

そんな私の様子を不審に思ったのか、斗真が小首を傾げて訊ねてきた。

「どうした。食べないのか？」

「あつ……うん、斗真がすごく美味しいように食べるから、つい見入つてたの」

「へえ。いつもの俺は美味しいように食べてないのか？」

「う、ううん、そういうわけじゃないけど。事故のショックがあるのに、いつも以上に美味しい

しそう

に食べてるなって思つただけよ」

私は慌てて誤魔化す。斗真は私たちが離婚寸前だったことを知らないのだから、大仰に驚いてはいけない。これからは気をつけよう。

食事を平らげて箸を置いた斗真は、つと席を立つた。

「俺は平気だよ。由梨さんのほうがショックを受けて食欲がないんじゃないかな?」

「そうかも」

「無理しないで、ゆっくり食べて。温かいお茶を淹れるよ」

「えっ?」

今日何度もわからぬ言葉が口から出た。

彼は今、私に温かいお茶を淹れてあげると言つたのだろうか。いつさい家事をしなかつた斗真が、そんなことをするはずがない。

だが斗真是平然としてキッチンへ行き、棚を探つてゐる。

キッチンは独立した造りなので、ダイニングテーブルからはわずかしか見えない。

「あの、斗真、お茶を飲みたいなら私が淹れるわ」

「どうして?」

「どうしてつて……」

斗真是華僑院家のお坊ちやまであり、会社社長なのだ。

幼い頃から家政婦さんに面倒を見てもらい、会社ではたくさんの部下や秘書がいる。自分でお茶

を淹れたことなんて一度もないだろう。

まさか、茶葉を全部急須に投入するとか?

惨事を予想した私は慌てて席を立つた。キッチンに駆け込むと、上品な所作で急須を傾けている斗真の姿が目に飛び込んできた。

すらりとした体躯の彼は姿勢がよく、純白のシャツが眩い。目を伏せているため、長い睫毛が端麗な容貌に華を添えている。長い指が、急須から注がれるお茶の湯気越しに艶めいて見えた。

まるで一枚の絵画のような美しい光景に、私は息を呑んだ。

すっと急須を下ろした彼が、こちらに視線を向ける。

「持つていくから、きみは席で待つていて」

「うん……」

貴公子然とした麗しい微笑に、とくろりと胸が甘く鳴る。

ぎくしゃくとしながら私は席に戻つた。

夫がお茶を淹れられることも、夫の指があんに綺麗で長いことも、これまで知らなかつた。私は今まで彼のどこを見ていたのだろう。それとも、記憶を失つてゐるのだから別人と考へるべきなのかな。

そんなふうに戸惑つてゐると、斗真がダイニングルームに戻つてきた。漆塗りの盆にふたつの湯呑をのせている。夫婦湯呑なので、大きさの異なるふたつの陶器には桜花紋が描かれていた。高名な产地の焼き物だ。

それは結婚したときに湊さんを含めたチームメンバーからもらった祝いの品だつた。結婚した当初は使つていたが、近頃はしまつたままだつた。しかも湯呑ふたつを同時に使うなんて、本当に久しぶりだ。

斗真是久しぶりのほうの湯呑を、私の前に静かに置く。その所作は丁寧で心が籠もつてることが伝わってきた。

「どうぞ」

「……ありがとう」

私は不思議なものを見るように、斗真を凝視した。

彼に向かいの席に着くと、自らの湯呑を傾ける。

「少し熱かつたね。舌を火傷しないよう冷ましてから飲んで」

「あの……斗真是お茶を淹れたことなんて、今までにないんじゃない？」

「うん。初めてだけど、秘書が淹れているのを見たことはあるから、やり方はわかるよ。妙な味はしないから安心してくれ」

朗らかに微笑んだ斗真是、私がお茶の味を心配していると思つたようだ。

どうしてこんなに私によくしてくれのだろう。

今までは家事を手伝うどころか、夫婦生活もデートもプレゼントもいつさいなかつた。新婚旅行すらも。仕事が多忙という理由で旅行は先延ばしにされ、間もなく冷え切つた関係になつたため、私からも提案しなかつたのだ。

記憶を失つているから別人格になつたということなのか。

だけど一年以上前のこととは覚えているわけで、人格が変わるほどではないと思うのだけれど。

湯呑を手にして、斗真が淹れてくれた茶を啜る。何度も飲んだことがある茶葉のはずなのに、格別に風味が増している気がした。

「美味しい……」

「よかつた。由梨さんは紅茶も好きなんだよね。今度は紅茶を淹れてみようかな」

どうしてそんなことを知つてゐるんだろうと思つたが、そういうえば結婚式の打ち合わせのとき、紅茶が好きと言つた気がする。

彼はこの一度きりではなく、今後も私に茶を淹れてくれるつもりらしい。

彼の思考回路がどうなつてゐるのか、記憶喪失との関係があるのか——どうしても気になつた私は率直に訊ねた。

「斗真是どうしてこんなに私を気遣つてくれるの？ 今まで家事はほとんど……というか、まつたくしなかつたし、結婚前からお茶を淹れたこともないわよね」

ふつと伏せた斗真の目が物憂げな色を帯びる。

「俺は今まで家事をしなかつたんだな。だから由梨さんの負担が多くて、喧嘩になつたんだろう？」

「ま、まあ、そうかも……でも、仕事が忙しかつたから仕方ないんじゃない？」

それが喧嘩の原因というわけではないけれど、とりあえず適当に話を合わせる。

ちなみに、私は家事を手伝つてほしいと要求したことはない。社長業をこなした上で家事まです

るのは無理があると思つたし、私の負担が大きいと訴えたら家政婦を雇うことを提案されただろう。だが今の斗真は、その点が夫婦関係を歪にすると思ったようだ。

顔を上げた彼は高らかに宣言した。

「これからは家事を分担しよう」

「……は？」

「由梨さんが夕食を作つてくれたから、俺は片付けをしようかな。ほかにも俺にやつてほしいこと、ない？」

絶句した私は石像のごとく固まつた。

夫のほうから結婚生活についてなにかを提案したことなんて、これまでに一度もない。

記憶喪失になつてからというもの、初めてのことばかりで対応に困る。

「えつと……急に言われても……思いつかないかな。手伝ってくれるのは助かるけど」

「そうか。じゃあ、これから相談しながら決めていこう」

微笑んだ斗真は席を立つと、自分の食べた食器を片付け始める。

「相談しながら……？」

唚然と独りごちながら箸を運んで、私もようやく食事を終えた。

私たちの場合はいわゆる政略結婚だつたので交際期間がほとんどなかつたし、起こつた問題を話し合つて解決するという機会も得られなかつた。結婚式を挙げるまでは周囲が目を光らせているので、揉め事が表面化しにくかつたという面もある。

第三者に介入してもらう方法もあつたが、会社の利害関係が絡るので公平に見てもらうのは難しい。結局は夫婦で解決すべきだという結論になつただろう。

なにより誰かからアドバイスされて斗真が変わるなら、なにも苦労しない。説教されて目が覚めるなんていうのは幻想だ。

だからこそ離婚という選択に至つたし、世の中の多くの夫婦だつてきっとそうなるのだろう。

それなのに、今になつて斗真は夫婦関係の改善に乗り出している。もつとも彼は離婚寸前だつたとは思つていないわけだけれど。

なんとも奇妙な展開になつたことに首を傾げながら、私は食器を手にして席を立つ。

キッチンへ行くと、斗真がこちらに手を差し出してきた。

「はい」

「……え？」

シャツを腕まくりした彼が、てのひらを見せている。

そこに皿を預けるという意図を理解した私は、戸惑いつつも空になつた食器を渡した。

斗真は、皿を流水で軽く洗い流してから食洗機に入れる。その姿は家事をともにしてくれる理想の旦那様だ。

これまでとのギャップが激しすぎて、記憶喪失のせいだとわかつてはいても、いまだにこの状況に慣れない。

「食洗機の使い方、知つてるの……？」